

井伏鱒二の「在所もの」と宮沢賢治の「文語詩」

—その風土と時代、農村不況への着眼を通して—

秋 枝 美 保

はじめに

井伏鱒二と宮沢賢治は、二歳違いの同時代生まれであるが、両者は生前には全く接点がなく、また文学の性格も正反対と言つていいほど異なる。比較すること自体がナンセンスと思われる向きが強かるう。しかし、当時、自らの生まれた地元に着目して、内部からその生活について書いた作家は極めて少ない。そういう意味では、同時代の文学として一脈通ずるものがあるといつてよい。そして、それは、日本文学史における新たな一時代の方向性の提言につながり、文学史の新視点の創出につながるものとして強調しておきたい。ことは、昭和四、五年から八年にかけての、プロレタリア文学隆盛期における文学のあり方の問題に発展していく。

今回の宮沢賢治学太福山セミナーにおいては、昭和初期の戦局へと流れる時代を、生活者の視点から描いたと思われる作品、井伏鱒二の「鐘供養の日」、及び宮沢賢治の文語詩「悍馬」を取り上げた。井伏の小説は、地域の鑄造所長の視点により金属供出という観点から、一方「悍馬」は、島田氏の説に従えば、牧人の視点により軍馬の調達という観点から時局を眺めるもので、共通した点が認められる(注1)。

ただし、「鐘供養の日」は昭和十九年一月発表の戦時下小説であり、賢治の作品と比較する場合、成立時期に時間差があることが問題となる。それが、今回のそもそもの研究の始まりであった。そこで、本論においては、昭和十

九年の作品発表にいたるまでの井伏の小説を調査し、戦争へと流れてゆく時局をどのように眺めていったのかを明らかにすることとした。その調査において、「鐘供養の日」で供出された鐘については、農村にとつての重要性への着眼が、すでに昭和六年から始まっていることがわかった。また、それは、農村の早魃など不作の問題と関連して描かれており、農村の危機的状況について描いた文章は昭和五年から登場していることもわかった。また、文語詩との共通の話題として、戦局と鉱山開発の隆盛などの関係についての視点など、共通する話題がかなり見られる。以下に、その共通性について報告し、賢治の晩年の関心事やテーマについて、新たな提言を試みる。

1、井伏鱒二の小説「鐘供養の日」と時局への視線

小説「鐘供養の日」(昭和十九年一月『陣中読物』)については、本誌「井伏鱒二の小説『鐘供養の日』研究1—戦時下小説としての位置づけ及び、鐘供出の事実と高田鑄造所の歴史—」ですでに詳細な検証を行っており、ここでは概要を簡潔に述べる(注2)。

小説は、戦時下の金属供出に際して、「備後竜禪寺」において行われた梵鐘供出の儀式を描く。住職は檀徒と相談したうえで、檀徒総代の「高田さん」のところへ打ち合わせにやってきて「供出梵鐘供養順序」を持参した。それ

は「第一、本堂にて国家安泰祈念のため、般若心経を誦誦。衆僧及び檀徒一同が鐘撞堂の前に並ぶ。第二、鼓鉢三通。第三、拈香法語。第四、供出梵鐘供養念疏を誦誦。第五、檀徒総代の祝辞。第六、鐘を撞く。一同衆音に十仏名を誦誦。住職、鐘を十回撞く。一同衆音に般若心経、消災妙吉祥陀羅尼を誦誦。」という段取りであった。

その翌々日が供養の日で、「高田さん」は紋付袴で奉書を懐中に家を出た。雪が降ったりやんだりしている中、鐘撞堂の前に祭壇が設けられ、法要の準備がなされ、六十人近い善男善女が集まっていた。「高田さん」の祝辞には、大東亜戦争のさなか「忠勇無比の皇軍将兵」が「御陵威」のもと「武勲」燦然光輝あり、「銃後の民」も「全能を動員」するなか、「竜禅寺の梵鐘ならびに仏具、軍事機材の資たるべしと晴れて応召す」とある。

まさに、出征兵士を送り出すのと同様に「梵鐘」を供出する様子が伺われ、人々の梵鐘に対する思い入れが強く伝わってくる。

そして、法要の最後、住職が最後の鐘を撞こうとしたところ、住職の顔には「不意に当惑の色が現れた。」「梵鐘は丸太でもつて四方から井桁に縛られており、「これでは鐘は鳴らないのである。」住職が梵鐘を突くと、梵鐘は「ゴツン」と悲しい音をたてた。高田さんが続いてつくと、また「ゴツン」と鳴り、高田さんの目には「涙がたまつてゐた。」檀徒たちは次々にかわるがわる鐘を撞き、別れを惜しんだ。それから勤労の人たちが、石材を運ぶ猫車に梵鐘を乗せ、駅の構内まで運んでいったが、雪が梵鐘の疣にたまつていき、音の出ない梵鐘に、見送る人々の悲しみがひとしお強く感じられる。

作品末尾では、梵鐘の銘に「末代に若し一朝国難ありて干戈調達の要あらば、当梵鐘、緊急その奉公に応せしむべし。」とあるのを見て、住職と「高田さん」が歴史談義を始める。鑄造の年代は「明和丁未年霜月吉日」とあり、住職はその鐘に「簡素清浄」の風があるとして元禄以前のものであると推測を述べる。しかし、「高田さん」は「明和年間」が田沼時代であり、「世を挙げて野卑になりさがっていた時代」であると、その鑄造時と現代を比較して、当時の「檀徒総代」と「住職」が「偉い人」であったのだらうと、鐘を鑄潰して武器を作らうとしている自分達が「面目ないことだ」という感慨を

述べるところで終わる。しかし、ここには、年代談義によつてうやむやにされているものの、秘められた時局批判がある。「明和年間」は金権社会であり、寄り合い芸者が盛んな「野卑」な時代であるが、一方で鐘を鑄造する余裕が社会にあったことを暗に示しており、「鐘」を鑄潰す現代よりは、その「野卑」な時代の方がよほどましだといっているようにも思われる。

この小説の登場人物、寺の檀家総代である「高田さん」のモデルは、井伏の友人であり、高田鑄造所（福山市新市町）の所長である高田類三である。我々は、このたび、類三の長男奎吾氏からの聞き取り調査によつて、モデルとなった寺が福山市芦田町の西教寺であることを知った。そこでの聞き取り調査により、この寺の梵鐘が高田鑄造所の鑄造になるものであり、寺の過去帖により、小説に書かれた梵鐘供出の儀式が、昭和十六年十月二十日に行われたことがわかった。

井伏鱒二は、全集の年譜によれば、昭和十六年十月中旬に小田嶽夫と秋田県酒田市に旅をしていた。全集の年譜に記載はないが、おそらくその直後に実家に寄つてこの西教寺の梵鐘供出の儀式に出会ったものと考えられる。その直後に陸軍徴用令書が舞い込み、あわただしく準備を整えて、同年十一月二十二日にマレー派遣軍に組み込まれ、従軍記者として、十一月二日出港。昭和十七年二月から同年十一月二十日に徴用解除となつて帰国するまで、十ヶ月あまりシンガポール市内に宣伝班員として従軍することになる。つまり、小説「鐘供養の日」は、この従軍体験の前に体験した事件を、帰国直後に作品化したものといえる。そこに井伏の戦争体験の集約がある。

昭和十八年には、全集所収の小説全五十五作品のうち、徴用中の体験を描いたもの、所謂「マライもの」と呼ばれる作品三十四篇があるほか、日本を舞台とするものが十九篇、童話一篇がある。中でも、小説「鐘供養の日」と同じ題材を描いた作品が、同作品の発表に先立って二篇あり、この三篇は「鐘作品群」と言つてもよいまとまりを持ち、井伏が銃後の生活を描いた戦時下小説として力を入れて書いていることが推測される。

これら「鐘作品群」は、以下のようになっている。

①短文「鐘」

昭和十八年五月五日『毎日新聞』に「断章」とし

て発表

②小説「ひかげ池」 昭和十八年五月十三日〜七月三十一日『中部日本新聞』連載

③小説「鐘供養の日」 昭和十九年一月『陣中読物』一号

いずれも、主人公が、福塩線のある駅に降りたところ、梵鐘供出の儀式に出る友人にばったり会い、その友人に付いて行ってその儀式に立ち会うという同工異曲の設定になっている。ただし、短文「鐘」は、最も随想風な感じの強い文章で、フィクション性はあまり感じられないが、友人の名前も、降りた駅名も記されていない。ただ、この短文には、「いま私の書いてある一つの長文からの抜粋」であるという付記がある。

おそらく、この「長文」なるものが、小説「ひかげ池」であると思われる。「ひかげ池」は明らかに小説である。井伏を思わせる主人公は「朽木三助」、友人は「米山さん」という名前で、「童禪寺の檀家総代」であり、「鑄造所長」であり、供出された梵鐘の鑄造者であるという設定になっており、駅名も「芦田町万山駅」（井伏の生家の最寄駅は、「万能倉駅」とある。三作品の中では、現実のモデルに最も忠実な設定になっている。この小説では、戦時下の配給制度（食糧配給の量は、一人当りに決められていた）の下、「朽木」が東京から郷里に「闇人口」を買いに来るということが中心の話題であり、戦時下の特異な食糧事情の中で、都会と田舎の関係性にゆがみが出ていることを描く、ナンセンス小説風の中篇小説になっている。

一方、小説「鐘供養の日」においては、友人の設定は、「ひかげ池」と同様「童禪寺の檀家総代」であるが、「鑄造所長」ではなく、もちろん鐘の鑄造者でもない代わりに、「郷土史愛好家」とされているが、名前は実際のモデルそのままに「高田さん」となっている。駅名については記載がない。この小説においては、小説末尾に、鐘を鑄潰す現代と、これを鑄造した江戸末期の時代社会の様相を比較する「高田さん」と「住職」の会話が描かれており、そこに秘められた時局批評にテーマがあると考えられる。

このように、三作品は、いずれも一つの題材を三様に描いており、それぞれにテーマと執筆意図が異なる。そこには、井伏がこの題材に込めた、社会

批評の重要性を読み取ることが出来る。このような実際に起こった一つの事件へのこだわりが、それを異なるテーマで、異なった作品形態でいくつかの作品に描き分ける小説技法を生み出していることがわかる。なお、小説「鐘供養の日」本文には書かれていないが、モデルとなった高田鑄造所では、幕末に大砲を鑄造していたことが当家に残る古文書から明らかになっており、金属供出は、幕末ペリーが浦賀に来たときにも幕府の命により各藩で行われていたことがわかっている。しかも、高田類三は、郷土史に深い造詣を持つ人物であり、歴史書を集める一方、歌人として「アララギ」にも投稿し、ひそかに文学創作を続ける文学仲間でもあった。これらのことは、短編「鐘供養の日」には書かれることはなかったが、このたびの我々の調査によって初めて明らかになったのである。これによって、小説「鐘供養の日」の時局批判が、井伏の中では、幕末から現代にかけての長い歴史の中で繰り返される日本の攘夷思想のあり方に焦点を定めていることが明確になった。そこに井伏鱒二の時代社会への視点が指摘できる。

これらの執筆のあり方には、賢治の詩や文語詩の執筆過程と共通するものがある。地域の現実の事件を体験したことが発端となり、それをモデルとして作品の構想が始まっていること、それをいくつかの視点からテーマをずらしつつ繰り返し作品化していることも共通する。つまり、一つの事件へのこだわりが強く、そこを基点として広がりのある認識が繰り返される過程がすかし見られる。

2、鐘に対する関心の始まりとその行方

さて、井伏の「鐘」に対する関心は、この戦時下に突然出てきたのではなく、すでに昭和六年の作品「秋祭り待つ子供たち―福山」（昭和六年十月一日『婦人サロン』三巻十号）なる文章に始まっている。この作品は、昭和五年から八年にかけての郷里のすさまじい早魃と不作について述べた一連の文章の中にある。ここで描かれる農村の窮状は、後述するように、賢治が花巻で経験していた早魃と不作の状況にそのまま重なるものである。井伏の郷里

備後地方は、江戸時代から百姓一揆が激烈を極めたという歴史を持つ。その農村において、寺の鐘は村人たちが寄附を募り、なけなしの金品を持ち寄って作り上げたもので、村民の願いの象徴であり、その「鐘」を打ち鳴らすことは、村人たちが決起するときの一致団結の意志表示であった。井伏の「鐘」への着目は、プロレタリア運動の隆盛期である昭和六年から始まり、運動が瓦解する八年にプレ「鐘作品群」といつてもよい「鐘」連作を生み出している。そこには江戸時代以来の農民の自主的な組織力についての指摘があり、そこには、プロレタリア運動について共感を持ち得なかった井伏が独自に見出した社会に立ち向かう自主的な大衆の姿がある。一般に、井伏の民衆像は小説「丹下氏邸」における農家の男衆「エイ」の「所詮は、屁はカゼですがな！」という諦観に満ちた言葉に代表されることが多いが、井伏の郷里の歴史を通して描かれる民衆像は、そんなに単純なものではないといつてよい。そこには、明らかに、プロレタリア運動における大衆像への反指定を意識した明確な共同体の姿が描かれているのである。(注3)

たとえば、「秋祭りを待つ子供たち―福山」には、祭りを待つ子供たちが撞く鐘に刻まれた年号や、寄付者など、鐘に関する記録を読みながら、「昔の私たちは結束して事件を起こす度ごとにこの鐘を打ちならして一軍の行進歌としたりしい。」とあり、江戸末期の百姓決起の様子を、次のように描いている。

「天明六年、百姓一同、食に餓ゆ。明和の凶歳に次いで、天明二年より六年に及ぶの間、全土をあげての大飢饉なり。二年春より夏にいたるまで霖雨絶えず、稲苗生育せず。三年春より七月まで、淫雨止みなく、諸川氾濫す。すなわち五穀実らず、乞食となつて諸国に流離するもの、その数を知らず。しかるに藩主は幕府の頭職にありて、おのが領内の豊歉栄枯を豪も知らず、佞臣は藩政の可否に論なく下民を呵責して、藩政に献替するもの更になし。百姓、苛斂に苦しめり。天明六年師走十五日朝にいたり、義民万左衛門すなはちこの鐘を打ちならして、百姓つひに烽火するところとなる。烽火は天を焦がし、鯨波は山を動かし、期せずして会するもの数万人、山河に暴露すること六十余日……」

そしてこの記録によると一揆は付近の寺や神社の鐘を打ちならし、その

音は轟々と響いて天地を動かしたと云つてある。」

昭和十九年の「鐘作品群」に先立つ「プレ鐘作品群」は、昭和六年のこの作品に続いて、「釣鐘の音」(昭和八年五月五日)「あらくれ」四号、「釣鐘の音」に関する研究」(昭和八年七月五日)「九年三月にかけて三回」「あらくれ」六号、二巻三号、二巻四号)と、昭和八年にまとまって発表されている。昭和八年は、二月に小林多喜二が警察で拷問死し、プロレタリア運動が瓦解に向けて大きく動き出すと同時に、時局が戦争へとなだれをうって動き出す歴史のターニングポイントである。

その時局に、井伏は、過去の歴史において同様に厳しい時代を生き抜く民衆の姿を、郷里の農民の「鐘」にまつわる姿勢に見出そうとしているようである。「釣鐘の音」には、村で時を知らせる鐘の音が、「生ぬるいものではなく、「私たちに新しい動作をうながす合図」であり、梵鐘が製造された時代には「おそらくこの村落の人たちのための実用むきな合図であつたのだらう」と村人の生きる姿勢を暗示している。さらに、「釣鐘の音に関する研究」においては、明治の初めに大三島のさる寺における梵鐘の製造時の様子を再現し、それが、職人や僧侶だけでなく、村人総出の、村人たちの願いが結集する一大事業であつたことを描き出している。

このほか、「鐘」は、村において様々な騒動が持ち上がったときにも撞き鳴らされ、村人たちが結集してその揉め事を解決する合図となつた。小説「川井騒動」や「刀についての覚書」にそのような農民の姿が描かれている。このように、「鐘」は、井伏にとつて、民衆の生きる主体性の象徴であり、社会的に主張を打ち出す合図であつた。昭和十九年の「鐘作品群」においては、戦局が行き詰る時代の中で、ついにその民衆の願いの象徴が声もなく押し黙らされ、錆漬されていく無惨な現実を描いていると見ることができ。小説「鐘供養の日」は、昭和六年ないし八年の「プレ鐘作品群」からの一貫した井伏の視点を通して、初めてその意図が十全に理解される。そこには、江戸末期から昭和初期に到る長い時間の中で作り上げられた農村の共同体を一貫して描き出す姿勢が貫かれている。

3、井伏鱒二と宮沢賢治が見た農村の窮状 その1 大正十三年の農業

井伏は、郷里の民衆の生き方の中に、現実を打開し、生き抜く力を見出そうとしたと考えられ、そこに井伏自身の願いも込められているように思われる。それでは、宮沢賢治・井伏鱒二両者の捉えた農村の現状には、どのような共通性、相違性があり、また宮沢賢治は、農村の窮状に対してどのような姿勢をとったのであろうか。両者の姿勢を比較してみたい。両者が捉えた農村の窮状には、程度の差や問題の構造はさておいて、かなり共通する部分が見られる。

井伏の随想「早魃地帯」(昭和五年七月二十七日読売新聞)においては、郷里に帰省しようとした井伏が、郷里の農村の窮状を知らせる兄の手紙によって、帰省することを断念した経緯を述べている。そこでは、「田舎の人々の窮状は実に惨憺たるもので、貧しかった家の子弟達は殆ど他郷に暴露し近年の連続的な早魃によつて、人々は資本(毎日の生活か或いは生活費か積みかさなる借金のことであらう)をどうすることもできないのみでなく、絶望のあまり柿の木の下に集まつて昼寝をする壮丁たちが多いといふ。」という有様で困った農民たちは「竜王様」に雨乞いをする。「谷川の水が干からび、田の稲が黒くなつて枯れ、人々が結集して雨の降りますやうに竜王様の石像に礼拝」している最中に帰省した私は、「竜王様の石像」が、「水を充たした盥のなかに入れてあつた」のを見、それを「元気をつけて、上空へ飛びあがらせるためであらう。」と推測している。

また、随想「田園記」(昭和六年三月一日『作品』十一号)においては、竜神にまつわる郷里の伝説や風習を伝えている。その第一部は「ウシトラ様」で、山中の小祠に祀られる神とあり、そこでの神楽について詳述されている。それは「問尋博士」が「五大河」の神である「大蛇」に会う話である。第二部は「竜王様」で、これも山中の祠に祀られているが、「水のことに関する一切の神秘を取り扱う神様」であり、「大早魃のとき、反発心の強い壮丁たちだけは、密議の結果、竜王様の石像を折檻することにした」が、一滴も雨は降らなかったという顛末が語られている。

早魃と「竜」との関係は、賢治の『春と修羅 第二集』におけるいくつかの詩の草稿にも見られる。詩「産業組合青年会」(一九二四、一〇、五、三三三)の「草稿的紙葉群」、詩「郊外」(一九二四、一〇、二九、三三四)の下書稿(一)がそれである。これについては、すでに拙論「宮沢賢治 大正十三年夏・秋の執筆活動―童話『土神ときつね』の成立の背景をめぐって」(注4)ですでに述べたが、これらの草稿の背景には大正十三年の早魃が発想の原点にある。大正十三年は大早魃の年で、稗貫郡では記録に残る水喧嘩が発生した。その江戸時代以来の水喧嘩の地、日詰の農業用溜池「五郎沼」を舞台に草稿は描かれており、「わたくしはこの黒いどてをのぼり／むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふ／この沼の夜の水を見やうと思ふ」とあり、竜が日詰の池から天空へ飛び上がる光景が詩に描かれている。この詩は、寓話「竜と詩人」との関連性も指摘されており(注5)、賢治の第二集以後の複雑な執筆活動の要にある詩の一つといえる。

第二集の秋以降の詩はこれまで暗い農村の現状を描く詩が多いことで注目されてきたが、それに先立つ春夏の詩の一部も早魃に関する詩といえるものが散見される。詩「測候所」(一九二四、四、六、三五)の下書稿(一)は題名が「凶歳」で、「凶作がたうたう来たな」という一句が入っており、わずかに農村の窮状に関する視線が見え始めている。これに続き、(一九二四、七、五)の同じ日付をもついくつかの詩も早魃を思わせる詩群である。これまでに「銀河鉄道の夜」の発想の原点とも目された詩「温く含んだ南の風が」(一九二四、七、五、一五五)の下書稿(一)においても、「稲沼／稲田の風(二)字不明) 跡に／風跡に」蛙が声を限りに歌う様がしきりに描かれてきたならぬ雰囲気を呈しているが、下書稿(二)の手入れ形には、1行の前に「水路のへりに腰かけて／みんな水を守つてあれば／温く含んだ南の風が／どしやどしや夜の稲を吹き／まっ黒な水路のへりで」という一節があり、詩の舞台として「水路」がたびたび登場している。「亜細亜字者の散策」(一九二四、七、五、一五四)の下書稿(二)にも、同様の「水路」が登場しているし、詩「この森を通りぬければ」(一九二四、七、五、一五六)の下書稿(一)の手入れ形においても、「どこら辺とも知れないそらが／いろいろ

にふるえたり呼吸したり／いはばあらゆる規約を示してゐる／そしてまはり／みんな夜水を引く人たちだ／そして林のまはりには／こつそりと田に水引く人が／息をこらしてゐる／と一節がある。また、「ほほじろは鼓のかたちひるがえるし」(一九二四、七、一五七)の下書稿余白の書き込みには、「このひと夜／風／銀河の／あかりの／なかで／水／路」を「守」った／わかもの／たち」あるいは「水を守った(以下数文字不明)」という一節がある。

前掲の拙論において述べたが、大正十三年七月／八月の岩手日報には、農村における現金収入の方法や農村の文化向上について様々な意見が挙がっており、その一つに産業組合制度の導入も挙がっていた。そこには、農学校の教育方針についての批判もあり、当時の世論における、農業経営刷新への関心の高まりを知ることができる。その中で、農業技術者の賢治は、居ても立ってもいられない状況にあつたであろうことが推測される。そこで賢治が構想したことが、詩「産業組合青年会」の草稿的紙葉群(第二葉)に見られる「わたくしが恋して」いる「いつともしらぬすものころの明るい風象」であり、そこでは「赤い鬼げしの花を燃やし／黒いすもの実をもぎる／頬うつくしいひとびとの／なにか無心に語つてゐる／明るいことばのきれぎれを／狂気のやうに恋」しているとある。それは、賢治が考える新しい農園のイメージ—美しい花と果物を栽培する—でもあるように思われる。商品作物の栽培は農家の現金収入の有効な方法であり、花の栽培と果樹園のイメージは、「MEMO FLORA」(羅須地人協会時代、大正十五年使用と推定)や童話にもしばしば登場する。

この時期の賢治は不作に泣く稲作ではなく、新しい農業経営の方法を模索していたと見ることが出来る。文語詩「副業」(春と修羅 第三集)所収「なにをやつてもまにあはない」の改作)には、「巨利を獲るてふ副業の、銀毛兎に餌す」る「頬あかくうつくし」い「べつ甲ゴムの長靴や 緑のシャツ」を着た豪農の子弟と思われる人物が描かれている。「頬あかくうつくしい」という表現は、ある階層の人を形容する表現らしく、ちなみに「風の又三郎」の高田三郎も「頬あかい」子供として描かれる。つまり、そのような新しい農

業経営に応じることが出来る農家は資本を持つ大農家に限るのであり、その構想を阻む農村内部からの無言の圧力が、詩「産業組合青年会」のテーマだと言つて良い。

そこには、農業技術者として新しい農業経営を推進しようとする立場と現実の農村の現状とのギャップに直面する賢治の苦悩があると見られる。

大正十三年は全国的な旱魃で、日本においてはこれを契機に農業の近代化が様々な模索されたのではないかと思われる。その一つが農業用溜池の築造で、全国で近代工法による築造が行われた。特に旱魃で難儀したのは瀬戸内海沿岸地域の農村であつた。神戸市の山田池(昭和八年竣工)、香川県観音寺市の豊稔池(大正十五年着工、昭和五年竣工)などがそれにあたる。井伏の郷里でも、大正十三年の旱魃を契機に、政治家主導により県営事業として農業用溜池大谷池の築造が始まり、大正十五年着工、昭和四年に完成した。井伏は、このとき工事によつて家が池の底に沈むことになつた老人を主人公に小説「朽助のある谷間」(『創作月刊』 昭和四年三月)を書いている。この小説においては、溜池の築造を喜ぶ下流域の農村ではなく、上流の谷間で湿田を耕し、傾斜地に畑作をして暮らしていた老人の視点から、谷間の生活を奪われる悲哀を描いている。井伏は農村の出身で村内の事情に通底していたと考えられ、一見農業振興に直結すると思われる農業用溜池の築造を、恩恵を蒙る側の視点からではなく、農山村の生活全体を視野に入れ、谷間で里の農村とは異なる独立した生活を営んでいた人々の生活が失われる悲哀を描いている。特に大金を動かして大事業を実施していく政治家の仕事には批判的なまなざしを向けている。井伏は農家の出身であり、農村内部の視点から、外部からやつてくる農村改革の動きを受け止める側から描いているといえる。このように、農村への視点は、商家の出身であり、農業技術者である賢治と、農家の出身であり、職業作家である井伏には、根本的に異なる点があるといえる。

4、井伏鱒二と宮澤賢治が見た農村の窮状 その2 昭和二年以降の農村

井伏の前述の随想「早魃地帯」「田園記」の後、昭和七年には、田舎の自作農の破産と心中の顛末を描いた「荒廢の風景」(「都新聞」二月二十七日(三月一日)を、同年、郷里から農村救済請願運動のために上京してきた老人について描いた「客人」(八月「新潮」二十九卷八号)がある。そして、昭和八年には前述の通り、「プレ鐘作品群」を発表。さらに、昭和九年には、雑誌社からの依頼で山形県庄内地方に東北農村の窮状を取材に行ったときのことを描いた「凶作余聞」(十一月二日、三日、四日「報知新聞」)を発表している。ここでは、井伏が郷里の農村に輪をかけた窮状を呈する東北農村に直面しての感想が述べられており、興味深い。

「凶作余聞」において、井伏は、今回の凶作が「天明以来の出来事」だといいい、その感想を「東北の凶作地帯に行つてみて先づ第一に私が感じたのは、決して同情の念を起すとか義捐金を集めるために奔走しようとかさういふ道徳的な感情でなく、何よりも先に私は不気味なる人生といふ感を深くした。」と述べている。その現状について「凶作地帯の子供たちが紅葉の枝を折り取つて一枝一銭ついで旅人に売りつけてゐた有様や、いつたいどうしたものだらうと嘆息してゐた田舎のブローカー」の様子などを挙げてゐる。また、その窮状のすさまじさを描くために一つの挿話を紹介している。つまり、地主が小作人に馬を貸したところ、馬が仔をはらんだので、小作人は馬の仔を売つて儲けることを考えた。小作人は地主に無断で仔を売る算段をして、周旋人と約束を交わしたが、それが地主の知るところとなつて付近一帯を巻き込んで紛争となつた。「土地の人の噂では、親馬の栄養不良のため生まれる仔馬は質が悪いだらうといふことであつた。ひよろひよろした仔馬を見るくらゐ田園荒廢の感を深くさせられることはない。しかもここでは、まだ生まれないう一匹の仔馬のため、近所一帯が喧嘩腰で血まなこになつてゐる。」といふ。そこには尋常でない凶作の現場がある。

しかも、「困憊の状況」(昭和十年一月一日「中外商業新報」)では、この記事に対し、東北出身の学生が、「物見遊山のつもりで凶作地に行つたのか」と

抗議の文章をよこしたという顛末を描いている。この抗議に対して、井伏は「大きな声で『気の毒な凶作地の人たちのためにご同情ください』と叫んでゐる学生たちは、見るからに興奮し熱狂した顔色をして、私たち迂闊に話しかけてもしたらどんなき違ひをされるかもしれない風景であつた。もう今ではさういふ企ての催しごとくも、東京の各駅頭各街頭から消えてしまつて、新聞の義捐金募集の記事もなくなつた。しかしこれで凶作地は救済されてゐるといふのではないだらう。」と述べ、東北の農村の窮状を描く記事を見るたびに「郷里の不断の凶作同然な農民の生活を思ひ出し、いつも重苦しい気持ちになつてゐたが目の前に直接それを見せ付けられない状態に立ちかへるといふにかなるだらうといふ一時のがれの気持ちでその日その日を暮らしてゐる。」と述べている。そして、抗議の手紙に対して、『いまにどうにかなるだらうと』といふ口のききかたは文章を書くものいひぶんとせずあぶん投げやりで逃避的な態度であると非難されるかもしれない。「甲略」けれど私はもう為政者たちに対して何ごとも期待する資格のない投げやりな気持ちの一介の市民にすぎないのである。」と文章を締めくくつてゐる。また、郷里の田舎で起こつた政治家の「大仕掛けないかさまご」を経験して「猛烈な懷疑派」になつた人々にとつて、「生ぬるい私たちの所謂純文学は子供らしく歯ごたえがなくてつまらないだらう。帰依する根拠を失つてゐる人たちにとつて、私たち帰依する根拠を失つてゐるもの書く作品が、慰めになる道理はない。」と述べ、「文学社会字もこの現状に対してはまことに無力であるのを私は痛感した次第だが、ひるがえつて一箇の作家が精進すればするほどその暮らしむきが切迫して行く事実と思ひ合はせ、急角度に色あせてしまつた。」と述べており、作家である自分自身も無力であり、どうすることも出来ない。「一介の市民にすぎない」といふ井伏の立場が明確化されている。そこには、無力であることにおいて同じ立場である農民たちに自らも並んで生きるという姿勢が見える。

これに対して賢治は、その後農学校教師を辞し、新しい農村文化の向上を目指して「羅須地人協云」を立ち上げ、農民のクラブ活動サークルを構想した。ちなみに、大正十二年の早魃の際には、地域の世論は抜本的な対策を求

めたが、それは行われることはなく、水喧嘩のあった滝名川にダムができたのは戦後、昭和二十七年のことであった。一方、花巻では、地域振興を企図して昭和二年株式会社花巻温泉が設立された。それに当たって賢治は花壇を設計するとともに、様々な花の種を取り寄せ、花の栽培に本格的に取り組もうとしていた。そこには商品作物としての花の栽培と花の需要を増やす活動としての花壇の設計があったといえる。最後は、東北の地質改良に関わる東北砕石工場技師となつて、農業の技術的な側面からの向上に携わつた。この間、賢治は少年小説「ポラーノの広場」を書き、「グスコープドリの伝記」を書き、ありうべき農村の姿を構想した。賢治は、農業振興、農村の活性化に向けて具体的な方策を構想するとともに、その実践活動に取り組んだといつてよい。しかし、現実的には、自身の健康上の問題や、その構想を阻む地域の現状があり、どの実践も中途半端に終わらざるを得なかつた。

中でも『春と修羅 第二集』『同 第三集』の作品には、その実践活動の中で初めて直面した理想と地域社会の現実とのギャップが描かれていると考えられる。その中で賢治は前述のとおり、農村活性化策を構想しながら自らの修羅性を自覚していくと同時に、自らの無力さをも感じていくことになつたのではないかと思われる。しかし、賢治は農業技術者として、農業技術の改良の観点から一貫してその実践活動を続ける一方、同時にその過程を描き続ける表現活動を続けた。それは、賢治が構想したライフスタイル「農民芸術」の実践であつたといえる。逆に言えば、賢治は職業作家を認めなかつた。そして、賢治が最後に選んだのは、農村の組織変革でもなく、農業経営の刷新でもなく、農業技術者の原点としての地質改良であつたといえる。さらに健康を害してそれできなくなつたとき、賢治に残されたのが文語詩の執筆であつたといえよう。つまり、そこに芽生えたのは、なすすべもない自らの苦しみを共有する人々へのまなざしと言えようか。

早儉（文語詩稿一百篇）

雲の鎖やむら立ちや、

鳥はさながら禍津日を、

森はた森のしろけむり、

はなるとばかり群れ去りぬ。

野を野のかぎり早割れ田の、 白き空穂のなかにして、
術をも知らに家長たち、 むなしく風をみまもりぬ。

早害地帯（文語詩稿一百篇）

多くは業にしたがひて 指うちやぶれ眉くらき
字びの児らの群なりき

花と侏儒とを語れども 刻めるごとく眉くらき
稔らぬ土の児らなりき

…村に県にかの児らの 二百とすれば四万人
四百とすれば九万人…

ふりさけ見ればそのあたり 藍暮れそむる松むらと
かじろき雪のけむりのみ

ここには、現実改革の構想はなく、あるのは、ただ「術を知らず」、「むなしく風をみまもる」「家長たち」への共感の詠嘆とでもいうべきものだと思われる。文語詩「早儉」は、前述の大正十三年十月の日付を持つ詩「昏い秋」『春と修羅 第一集』所収）が改作されたものである。当初の表現では、詩の最後の行は、「ひとは幽霊写真のやうに／白いうつばの稲田に立って／ただぼんやりと風を見送る」であつた。この詩においては、農村の人々が早魃の田を杲然と見守る姿を、一つの風景として「写真」のように見ているのである。その視点は明らかに人々の外にある。それが文語詩においては、そこにたえず「家長」に視点が焦点化され、そこに感情移入がなされている。それは、かつて肥料設計をし、稲の生育に責任を持ちながら成果を挙げる事が出来なかつた農業技術者の自分の経験した無力さ、むなしさそのものと通ずる。それは、また「眉くらき」「稔らぬ土の児ら」への、暗い未来の共有の詠嘆でもあつたといえる。

それは、豊かな商家の長男としての立場からは、とても口にするこので

きない表現だという判断もできるかもしれない。しかし、文語詩においては、それとなく死を覚悟した賢治が、現実的な立場を離れることによって、現実を越える自由な立場を獲得したのかもしれないと思われる。

井伏は、東北の凶作地帯に行き、「不気味なる人生といふ感を深くした」のであったが、そこでの生き方について、次のように述べている。

木の枝につかまつて、手がしびれ耐へきれなくなつた人だけが木から落ちるのである。けれど、手のしびれたことを忘れ、機械的に木の枝を掴んでゐる人だけが落ちないのである。意地とか恩愛とか、さういふ情意的なもののため、手のしびれたことを忘れてゐる人だけが落ちないでゐるのだらう。

賢治の生き方は、まさにここで言う「手のしびれたことを忘れてゐる人」と言えるかもしれない。農村の改革について様々な実践を企図した賢治であったが、最後にはその実践家としてのアイデンティティを失い、表現者としての自己に徹せざるを得なかつた。そこに生まれたのが文語詩であつたということだけは言える。そこには、現実に対する無力さの自覚から出てくる、同じく厳しい人生を生きる人々への共感のまなざしがある。心象スケッチが、「すべてわたくしと明滅し／みんなが同時に感ずるもの」（『春と修羅 第一集序』）であり、「みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたもの」であるとすれば、その「みんな」は、文語詩においては社会の人々へと集中したと考えてよい。自分自身を「最後の三もん文士」でありたいと述べ、表現を生活の糧とした井伏とは表現者としての立場は異なるが、文語詩におけるその人々への視点には共通するところがあると言つてよい。「無力」な活動に人生をかける人間同士の共感がそこにはある。ただ、その活動を「身過ぎ世過ぎ」とする感性は賢治にはなく、その根底には「農民芸術概論」に述べられたような独自のユートピア観があつたのではあるが。そのまなざしは、社会の弱者である身売りした農家の娘たちに、最も強く感じられる。「たはれめ」や「うたひめ」への賢治のまなざしは、井伏の「炭鉱地帯病院」における死んだ娘へのまなざしにも通ずるところがあるといえようか。井伏は、貨幣経済の隆盛が農村を圧迫するとともに、そこに風俗宮

業の隆盛を生み出し、農村の生活に微妙な変化をもたらすことについて、江戸時代、明和年間と昭和初期に共通する点があるという社会批評の視点を持つていた（注6）。それは、文語詩「年は世紀に嘗て見ぬ」において、賢治が花巻温泉の設立について持つていた視点にも共通するものである。不況が鉱山の発掘をうながすことや、それと同時に並行して戦争への流れが生み出されること、その鉱山文化が農山村の風俗に微妙な影響をもたらすことなど、時局批評について井伏と賢治の持つていた視点には意外にも共通する部分が多いのである。これについては、別稿に譲る。

最晩年の賢治の心理については、すでに島田隆輔氏が「歌ひめ」「たはれめ」がうたわれた詩を中心に詳細に論じているところであり、そこでも「われひとしくうちなやみ」という「せなうち痛み息熱く」（了稿）のち最終の青インク手入れ形」の共感の一句を指摘しているところである。また、『兄妹像手帳』における「西暦千九百三十一年秋の／このすさまじき風景を／恐らく私は忘れることができぬであろう。」という一句を挙げ、その間の「詩人として技師として、その無力感底知れぬものであつたらう。」と賢治の心境を推し量っている。（注7）ただ、それは、「詩人として」どうであつたのだろうか。そこには新しい表現の世界が開けていたのではないかと推測する。それが本稿の結論である。

5、井伏鱒二と宮沢賢治の違い―風土と立場―

井伏鱒二と宮沢賢治には、所与の条件としての風土と社会的立場に大きな違いがあり、そこから考え方、生き方への違いが生じたことが挙げられる。

先ず、井伏鱒二の生家は農家であり、しかも、子弟を東京の私立大学に行かせる程度の余裕を持つ中間層の農家であつた。したがって、その立場はあくまでも農村内部にあつた。これは、賢治が商家の出で、農村の外部者であつたこととは大きく異なる。

しかも、その農村のあり方は、備後地方と東北地方では大きな違いがあるといえる。これまで両者の捉えた農村の窮状について時代的な共通性を述べ

てきたが、その程度はやはり異なるといわねばならないであろう。瀬戸内海は温暖な気候に恵まれた地方であり、水不足に悩まされたとしても、すぐにそれに対応できる地域の経済力があつた。井伏が東北を視察した際、稲が気温に敏感な作物であることを初めて知つたと述べているとおりである。したがつて、井伏の小説には貧農層らしい階級が登場しない。そこに描かれている不遇の人物は、ハワイに出稼ぎに行つた経験を持つ谷間暮らしの老人（「朽助のゐる谷間」）や、流れ者の孤児で、庄屋に拾われて一生をそこで暮らす年老いた男衆（「丹下氏邸」）など、いわば農村の外部もしくは周辺に位置する者たちである。

そのように経済的に比較的余裕があるためか、井伏の作品に登場する農村は、基本的に中間階級の層が厚いしつかりした組織を持つている。小説『楳ツアと『九郎ツア』は喧嘩して私は用語について煩悶すること』に描かれたように、地主、村会議員、顔役、自作農、小作人と、緻密な階級区別によつて生活のあり方が細部まで決められており、整然とした組織をなしている。それは、井伏の作品においては二つの感想を持つて描かれる。一つはその組織の決定性であり、どんなことがあつても決して変わることはないだろうという諦観をもつて描かれる。井伏の文学に漂う諦観は、ここから発するものではないかと思われる。また、一方、前述の「ブレ鐘作品群」に描かれたように、村内では村としての独自の伝統的な意思表示の仕方が確立されており、それに対しては力強い信頼が寄せられている。それは、井伏の確固とした民衆像の基盤となつていえる。井伏の郷里では、中間層の農家がしつかりした発言権を持つていたために百姓一揆が整然と起こり、しかも言い分を通じた実績も持つ。それらを踏まえながら、井伏の文学には、明確な農村共同体の姿が描かれていると考えられる。

これに対して、宮沢賢治の作品には、そのような共同体の姿が登場しない。飢餓の地、東北の農村の現状は、井伏が人生の「不気味」さを感じたと述べているとおりの惨状を呈する。その状況は、文語詩にも様々に描かれているところである。そのような土地では、農民自体に力がなく、小作争議も起こらないと当時の地方新聞が報道しているとおりである。そういった現状に取

り組もうとした賢治は、新興階級らしい改革への情熱を持つて、先端的な科学技術と組織像を持つて現状打開への新しい方策を構想したといつてよい。あまりにも厳しい現状に、賢治は二つの方策をもつて臨んだ。一つは技術的な面から農業改善策に取り組むことであり、もう一つはユートピアと夢を描き、現実を一旦に離れてみせることであつたといえる。その改革の情熱が、父の代に急速に発展した家業の勢いと経済力にうらづけられていたことは間違いない。また、後年、その経済力が逆に農村をさらに追い詰めることに対するジレンマも生じ、晩年には自らの「慢」を反省することもなつた。それとなく死を覚悟しつつまとめられた「文語詩」においては、現実改革の実践から立ち止まり、静かに周囲に寄り添い、周囲を見守る姿勢が強い。そこで眺めた地域の人々の姿には、井伏の見たものと共通のものがあると感じられるように思う。

注1 島田隆輔「宮沢賢治の文語詩稿の側面―その風土性と時代性（本誌）

注2 青木（秋枝）美保「井伏鱒二の小説『鐘供養の日』―『高田さん』のモデルと梵鐘供出の事実を追つて」『福山大学社会連携推進事業 P

JT5』地域の文化再発見」井伏鱒二の文学に描かれた地域文化 井伏鱒二の小説『鐘供養の日』研究1―戦時下小説としての位置づけ及び梵鐘供出の事実と高田鑄造所の歴史― 福山大学人間文化学部人間文化学科 近現代文学研究室発行 二〇〇九年十月三十日

注3 秋枝美保「井伏鱒二におけるプロレタリア文学への対応」（日本文学研

究会広島支部例会 口頭発表 二〇一〇年五月 比治山大学にて）

注4 秋枝美保「宮沢賢治 大正13年夏・秋の執筆活動―童話「土神とき

つね」の成立背景をめぐつて―」『論叢宮沢賢治 第三号』 中四国

宮沢賢治研究会 二〇〇〇年八月五日

注5 平澤信一「祀られざるも神には神の身士がある―『産業組合青年会』

と「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」』『春と修羅 第一集研究』一九九八年三月 イーハトブセンター

注6 秋枝（青木）美保「井伏鱒二の『幕末もの』―戦時下小説『鐘供養の

日』を基点として―」『井伏鱒二の（まげもの）I―龍馬の時代と井

注7 伏鱒二の歴史小説』 ふくやま文学館 二〇一〇年九月十日)
島田隆輔『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』(朝文社 二〇〇五年十二月)